

「土佐清水市郷土史同好会9月定例会」

「市史編さん講演会」修了 —学校教育史—



↑ちょうど清水中学校の体育祭があり岡崎哲也教育長もそちらに出席するため参加できず「出席の皆様によろしくお伝えください」との伝言がありました。

16日(土)土佐清水市中央公民館3階多目的ホールにて午前10時より約1時間にわたり『新土佐清水市史』で学校教育史を執筆した谷岡暁美編集委員の「本市学校教育史」講演会が開催された。主催は土佐清水市郷土史同好会(会長武藤清)、共催は土佐清水市教育委員会(教育長岡崎哲也)で市史関係者・郷土史同好会会員・市民など30名の出席者があった。

本市学校教育史を「明治期」「大正期」「昭和戦中期」「昭和戦後期」「平成期」「令和期」に時系列で分け、その時代毎の教育的特色や児童・生徒を取り巻く生活環境のことなどを丁寧にお話しいただいた。

「明治の学制発布後のときに、米一升が5銭のときに、授業料が50銭であった」という話は、今では当たり前である「教育を受ける」ということが当時いかに高価なことだったのかとビックリした。授業料が無償化されるのは明治33年(1900)のことである。

講話は、学校統合の流れ、郷土の偉人中濱万次郎を通じての教育、防災教育、清水高校の高台移転など多岐にわたり、概要をまとめ分かりやすくお話しいただいた。現在の土佐清水市の教育環境や課題なども確認することができた。

講話終了後の質疑応答では、教育研究所の取り組みなどについてもっと触れてほしかったとの意見があった。1時間半という限られた時間であり、この時間でそれを話すことは無理がある。教育研究所の取り組みは、どちらかという教員側の研修の歴史という要素が強く、教育を受ける側からの教育史や市民の視点からの教育史とはやや異なるようにも感じる。今回の『新土佐清水市史』は、あくまでも教師の視点ではなく、市民の視点から捉えた学校教育史を重視して執筆いただいているので、その点をご理解いただきたい。

万次郎人生の概観⑬

「小笠原周辺海域での^{いちばんまる}壹番丸による捕鯨」

(1) 「豪商平野廉蔵・万次郎」と「幕府」の共同経営の形態

小笠原調査団団長・外国奉行水野忠徳は、調査結果の報告を幕閣に提出した。その際に万次郎の提案した小笠原諸島近海での捕鯨のことも盛り込んだ。新たに日本領土になった小笠原諸島の近海には米国の捕鯨船が集中して捕鯨を行っている。これらの海洋資源は元々日本の資源であり、日本が捕鯨を行わないのは大きな損失であった。このころ米国の捕鯨は、鯨肉を食べる習慣はなく捨てて、鯨油の採取が主目的であった。これをランプ等の灯火として利用していた。

水野の報告書を受けて幕府は、全国に日本近海で捕鯨を行うことを奨励し、その通達を行った。これに伴い万次郎は、英語の弟子である越後の豪商・平野廉蔵の出資により外国船を購入し、これに捕鯨設備を装着させて捕鯨「壹番丸」を造った。そして、万次郎と平野は、捕鯨事業に幕府も巻き込み、小笠原近海で捕鯨事業を開始させた。

幕府とは、①～③の幕府と万次郎等双方にとってウイン・ウインの関係で契約を交わした。

- ①乗組員の給与及び食糧は幕府負担。
- ②船賃は不要であるが、捕鯨しないときは平野が運搬船として使用しても可。
- ③船の破損があったとき、幕府が修理代を負担する。

万次郎等は、壹番丸(船長・万次郎)で文久三年(1863)3月17日父島を出港し、9月14日に帰港した。マッコウクジラ2頭の漁獲であった。1か月の漁獲としては決して悪い成果ではなかったが、全体的な評価は低かった。

坂下門外の変で老中安藤信正が失脚したことにより小笠原諸島の開拓がストップしたことは既に前号に記した。これにより新たにスタートした捕鯨も中止せざるをえなくなった。水野忠徳・万次郎等の調査から9か月、文政三年5月13日、八丈島から小笠原諸島へ渡島・移住してきた開拓者たちは全員引き揚げとなり、小笠原諸島は少数のハワイ等から移住して来た外国人たちのみの元の島の状態に戻った。ただ、万次郎等調査団により小笠原諸島が日本領土であると確認した事実は唯一残った。これが明治以降、小笠原諸島が日本領となる大きな契となった。その点から万次郎等の功績は大きい。

今回は、いよいよ日本人が初めて外国人を逮捕した事件(=ホーツン事件)について記述する。この逮捕した日本人こそ我等が万次郎である。万次郎が船長をする壹番丸で発生した強盗未遂事件は、思わぬ方向にその事態が展開する。国際問題にまで発展するに至った。英国との生麦事件の補償金問題、小笠原諸島の帰属問題にまで事が及ぶのを懸念した幕府は、この事件を政治決着に持ち込み幕引きを図った。ここに不平等条約の締結と欧米の軍事力を背景とした帝国主義の圧力が絡む。そんな中、万次郎は証拠を固めながら淡々と犯人二名を追い詰め、法の下に正義を貫いていく。(次号へ続く)